

慰問先にて。「久々に大笑いした」「泣いた」
「元気をもらった」「シルバー万歳」の声に
励まされるという▼



巻頭特集

仲間と笑顔と本気が、 人生をもっと楽しくする！

シルバーボランティア劇団 かがやき

“生涯現役”で時代劇を

シルバーボランティア劇団「かがやき」は、1994年に西区で開催された文化講座「60歳からの心と体をほぐす素人芝居」が出发点。半年の講座が終わるころ、「これで別れるのはおしい。続けていこう」との声が上がり、受講生有志26名で劇団を結成。団員から名前を募り、「かがやき」と名付けられた。

「生涯現役」を掲げ、名古屋市内を中心に老人施設や老人会などを訪問。人情物、水戸黄門、喜劇、寸劇など、笑いあり涙ありの時代劇を演じて、多くの人に笑顔を届けてきた。

毎週木曜の午前に西生涯学習センターで稽古をし、依頼に応じて慰問公演へ出かけたり、西文化小劇場などの劇場公演に招かれたり。地道な活動を続けていたが、コロナ禍で状況は変化する。

「慰問依頼は一切なくなるし、団員は7名になってしまつて。存続が危ぶまれていました」と話すのは、団長になって3年目の高野さん。入団したのは5年前。まさにコロナ禍で、劇団が最も苦しい時期だった。

当時、団長をしていたのが、団長経験が2回あるリーダー的存在の田口さんだ。「コロナのころは2年半ぐらいお稽古も中止していました。でも、これだけ歴史のある劇団を、絶対にくすことはできないと強く思つて。広くお声かけしました」。仲間集めに奔走し、なんとか危機を乗り越えた。

旗揚げから30年以上が過ぎ、公演回数は270回を超えた。2025年には、西文化小劇場にて30周年記念公演「通りゃんせ(約束) 深川木戸番ものがたり」を成功させ、テレビや新聞でも取り上げられたという。

「その時に16名応募があつて、稽古日に来られる4名が入団しました」と田口さん。現在は男性5名、女性10名の計15名で活動。生涯現役を掲げる劇団の歴史は、今も演劇が大好きな66〜92歳の仲間たちによって受け継がれている。

全員が、役者かつ裏方

「かがやき」では、年に1作品、新しい演目に挑戦。脚本・演出・指導を担当するのは、劇団名古屋の俳優・劇作家のごとつてるよさんだ。

稽古は、発声練習からスタート。「あ・え・い・う・え・お・あ・お」——元気な声が稽古場いっぱい響き渡る。早口言葉にも取り組み、ウォーミングアップ完了。その日の演目に合わせて小道具を用意し、机や椅子で仮舞台を整え、いざ演技の練習に。

稽古といえども、本番さながらの熱演が続く。役になりきっている表情、所作、台詞回しには、思わず引き込まれる。途中には懐かしの歌も織り込まれ、稽古場には歌声が響く。台詞が飛んだり、間違えたりすることもあるが、そんな時は台詞を追っ

ている団員がさりげなくフォロー。シーンの節目ごとに動きや間を確認し合い、笑い声上がることもある。

稽古場は終始、和やかな空気に包まれながらも、皆、手を抜くことなく、真剣な表情で取り組んでいた。

全員が舞台に立つ役を持ち、出番がない時は照明や音響などの裏方を担当する。役が決まると、その役に合わせた衣裳や身につける小道具は、各自が工夫して用意。衣裳は古着店で探したり、先輩から譲り受けたりすることもあるという。

ひとたび舞台が始まると、手の空いている団員は一人もいない。まさに全員でつくり上げる舞台なのだ。

笑顔と拍手で伸びる背筋

ボランティアで慰問公演を中心に行っている劇団「かがやき」。団員は手弁当で公演会場へ向かい、活動経費は団員の会費のみで賄っている。練習会場の使用料や講師への謝礼、舞台

30周年記念公演にて



小道具の制作費、保管倉庫代など、運営にはさまざまな費用がかかり、厳しいのが現状だ。

それでも32年間、劇団が続いてきたのは、なぜだろう。

団員にとって大きな喜びとなっているのが、公演でのお客さんの反応だ。「終わって舞台を降りて、握手するでしょ。手を離さないの。下手な演技を、喜んでくれるのよ(笑)」と嬉しそうに話すのは、最年長団員の大河内さん。御年92歳。

高野さんも「失敗してもしなくても、公演が一番楽しい。お客さんの顔が見えて、真剣になっているとか、喜んでいて分かるからね」と話す。舞台上に立つて初めて味わえる観客の笑顔や拍手は、団員たちにとって何よりの励みになっている。

田口さんは、公演に臨む団員たちの姿について、こう話す。「高齢者施設への慰問が多いからこそ、平均年齢78の高齢者でもこんなに元気にできるんだという姿を見せたいんです。舞台上立つと、みんな背筋がピンと伸

びて、表情もガラッと変わります。本番は遊びじゃない。お客さんに見ていただくという気持ちで臨んでいます」。

台詞や出番、立ち位置など、演劇は覚えることが多い。「日ごろから、あの台詞どうだったかなと考えるようになりました。非常に頭の体操になっていますし、公演に向けて体調にも気を付けています。劇団の活動は、とても健康的だなと思います」と高野さん。

団員の大切な「居場所」

そもそも一つ、劇団は団員たちにとって大切な「居場所」にもなっている。「55歳以上が入れる劇団ですから、病気などで活動できなくなる団員ももちろんいますが、体調が戻ってお稽古を再開してくれた団員もいます」と田口さん。一旦活動を離れることになっても、「いつでもいいから戻ってきてね」と皆で声をかけ、戻った時には拍手で迎えているという。稽古の

後にランチに行ったり、桜のシーズンは花見にでかけたたりして、親睦を深めている。

このご時世、シルバー世代にとっても、家庭以外に集える「居場所」の存在は大切なもの。演劇という共通の趣味を通じてつながる仲間との時間は、団員たちにとって心地よい居場所になっている。

劇団「かがやき」では常時、劇団員を募集している。加入条件は55〜70歳であることだけ。「芝居も歌も大好きな方、一緒に生きがいを見つけませんか？」という劇団の呼びかけにピンときたら、気軽に問合せをしてみてください。

劇団は現在、毎年秋に西生涯学習センターで開かれる「ふれあいまつり」に向けて、新しい演目を猛練習中だ。普段は半日の稽古も、この時期は1日稽古になる。

同センターで活動するグループの発表会として41回目を迎える今年の「ふれあいまつり」は、10月24日(土)・25日(日)に開催。劇団「かがやき」は25日(日)13時15分から開演予定だ。ぜひ会場で、団員たちのかがやき、熱演を楽しんでみてはいかが。

芝居も歌も
大好きな方、
大歓迎!!

劇団員募集!!

《加入条件》
55〜70歳の方
《問合せ先》
080-3173-9498(高野)

入団のきっかけ&元気の秘訣

夢をかなえた兄への思い

田口 まり子さん (79歳)

TAGUCHI MARIKO



22歳で亡くなった役者の兄への思いを胸に「いつか演劇をやりたいな」と願っていました。60歳の時、娘が新聞で劇団募集を見つけてくれたことがきっかけで入団。今も兄に「頑張ってるよ」と報告しています。元気の秘訣は、筋力をつけることと、家にもらず人と会って話したり歌ったりして、声を出すことです。

チャレンジして、人生を楽しむ

大河内 利秋さん (92歳)

OKOUCHI TOSHIAKI

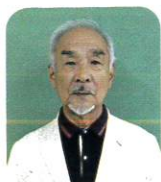


定年後「何か始めよう」と、新聞で見つけた講座に参加したのをきっかけに、今日まできちゃった(笑)。見せる方は楽しく、見た人は喜ぶ、すごい力がある劇団だと思う。元気の秘訣は、常に前向きにやることかな。月1回ゴルフして人生を楽しんでいるけど、やっぱり「チャレンジ」は大事。目標は100歳までチャレンジです。

劇団活動が自信と元気の源

高野 和男さん (79歳)

TAKANO KAZUO



田口さんに誘われて音響担当で入団したのですが、初日から「人が足りない」と国定忠治をやることになって(笑)。台詞覚えは大変ですが、「趣味は演劇」と胸を張って言っています。一生懸命やっていることが、自信になっています。特別なことはしていませんが、おかげさまで健康です。劇団活動のおかげかもしれませんね。

今日が人生で一番若い日

今井 真由美さん (67歳)

IMAI MAYUMI



「今日が人生で一番若い日」が私のモットー。だから、迷ったらやるべきと思っています。昔から演劇をやってみたくて、30周年記念公演のチラシをきっかけに入団しました。役の心情や表情、動きを考えるのが、すごく楽しいです。始めて1年半ですが、好きなことを長く続けたいので、食事や運動にも気を付けています。